

原古処「讀源語 五十四首」について

—漢詩人の『源氏物語』への関心—

小谷 喜久江

日本大学大学院総合社会情報研究科

Hara Kosho's Kanshi Poetic Interpretation of *The Tale of Genji*

—Influence of *The Tale of Genji* on Edo Period Kanshi Poets—

KOTANI Kikue

Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

Hara Kosho (1767-1827), father of Hara Saihin, was an official scholar of the Akizuki domain in Kyushu. He is also famous as a kanshi poet. Among his many poetry collections, his masterpiece is *Doku gengo 54 shu* (Fifty-four poems on *Genji*). His close reading of *The Tale of Genji* inspired him to write fifty-four poems to match the number of its chapters.

Kosho made some hanging scrolls from these poems with calligraphy and gave them to friends as presents. The scholar Rai Sanyo saw one of his hanging scrolls at an inn where Kosho had stayed. Sanyo was amazed and added a comment at the end of Kosho's work. Koga Kokudo did the same when he visited the inn. Thus, Kosho's *Doku gengo 54 shu* became famous among scholars.

In this paper, I will examine why Kosho wrote *Doku gengo 54 shu* and how he was influenced by Chinese popular novels called *hakuwa shosetu*, which were popular in the middle of the Edo period.

1.はじめに

原采蘋の父原古処（1767-1827）は秋月藩の藩儒であり、李白を生涯の友と詩の中でも言っているように、漢詩人としてもその名を知られた人である。儒者であったが国学にも造詣が深く、多くの和歌も書き残したとされるが、現在は僅に数首が残されている。古処の国学傾倒を示す遺作の一つに『源氏物語』を題材にして詠んだ「讀源語 五十四首」がある。古処の遺墨の中には「讀源語」の詩が多く見られる。またこの五十四首を散らし書きにした書幅を旅先の主人に与えている事は、頼山陽が書き残した書幅の跋とともによく知られている。山陽はたまたまその旅館に居合わせてこの書幅を見て、驚嘆したという。古処は他にもこの傑作を何人かの人へ書き与えていることが井上蘭崖氏の報告¹によっても知られる。

頼山陽は跋で、『源氏物語』を熟読していなければこのような詩は書けないと言っているように『源氏物語』は古処の愛読書であったと思われる。古処は愛娘の采蘋にも「讀源語 五十四首」を散らし書きにしてしかも絵入りで美しく仕立てたものを贈っている。采蘋はこれを愛誦し、また書き写して遊歴の際には持ち歩き、詩人学者に見せた²と言うが、自分では『源氏物語』に親しんだ様子はない。

本稿では原古処が「讀源語 五十四首」を書き残した経緯を、その時代背景にあった儒者たちの日本の古典への関心と、享保以来の中国白話小説の流行に伴う『源氏物語』への関心などの時代的要因も検討しながら明らかにしていきたいと考える。また「讀源語 五十四首」の内容についても紙面の許す限り紹介をする。

¹ 井上蘭崖「原古処先生の源語詩巻に就いて」『筑紫史談』第六十二集、福岡県文化財資料集刊行会、1977

² 緒方無元編『郷土先賢詩書画集』郷土先賢顕彰会発行、1975

2. 国学者による『源氏物語』の受容

『源氏物語』が江戸時代文学の様々なジャンルに於いて享受されてきたことは周知のことである³。特に元禄文化の終焉とともに、文化の中心が江戸に移行してからは、賀茂真淵ら国学者による『源氏物語』の講義が行われ、また研究書の執筆などによって、県居門の門人を通して知識階級に教養として浸透して行った。その背後には田安宗武が荷田在満や賀茂真淵を登用し、国学を奨励したことと、豪商の村田春道らの援護があったことが大きくかかわっている。宗武は娘たちの教育係に真淵を起用し、信姫の婚礼の持参書として『源氏物語新釈』を書かせている。真淵の門人は、大名クラスから富豪にいたるまで三四〇人ほどで、その中の三分の一が女性であった。上層武家の妻や娘に交じって御殿女中の存在が目立つ。このことは武家の教養の受容の高さを表している。県門の三才女と言われた土岐筑波子、鶴殿餘野子、油谷倭文子はそれぞれ歌集は勿論のこと紀行文、消息等の作品を残している。彼女たちが職業上、高い教養を要求されていたこともあるが、古典主義的風潮にあやかって、『源氏物語』の宮廷生活への憧れと紫式部への憧れも同時に作用していたと考えられる。文才をもって生まれた女性たちが、自己表現の機会を真淵によって与えられたのである。荒木田麗女(1732—1806)は、伊勢の神官の娘であったが、『源氏物語』に触発された1人で、宮廷を舞台にした多くの物語を書き残している。その後、国学は真淵の門人本居宣長によって関西方面に、又村田春海や橘千陰らの江戸派の歌人によって江戸で継承されていた。

江戸時代に出版された女子の教訓書は儒者によって書かれたものが多く、儒教に基づく倫理観からは『源氏物語』は『伊勢物語』と並んで淫乱の書と位置付けられ、母や娘は読むことを禁じられた。その一方で、寛政時代の老中松平定信は「源吾、勢語のたぐひは、甚淫乱なることを教へ申し候やうなる事にて、行にはなりがたく候、しかし強ひて防ぎ見ざるは、俗に背くにて候ふ間、心さへ定まり候はゞ、

かの文など見るも、風流なる事に候はん」⁴と容認する姿勢を示した。定信の父田安宗武は上記の如く国学を奨励したばかりでなく、自らの優れた業績も残している。この父の影響を受けた定信は『源氏物語』の夕顔をテーマに詠んだ歌が人々に愛唱され、「夕顔の少将」と呼ばれた⁵ほど、『源氏物語』に対する造詣が深かったようである。

文化九年に致仕した定信は築地下屋敷の「浴恩園」に、寛政の改革の推進役であった堀田正敦を中心に『寛政重修諸家譜』の編纂にあたった人々を集めて文人サロンを設けていた。文化十一年十一月には堀田正敦による「詠源氏物語和歌」が催された。これはそれぞれの巻名を題材にして各人が1首ずつ読むというもので、院政時代から行われてきた伝統的な催物であるという。この中には村田春海養女のたせ子や大名の奥方など四人の女性歌人も参加しており、清水浜臣など江戸派の歌人の活躍が見られる。真淵の弟子であった江戸派の歌人たちは、定信を中心に活躍の場を広げて行ったものと思われる。たせ子は高田藩榊原家に仕えた女性で、「文かくたより、歌よまんたすけとなるべきは、源氏の物がたりのえんにこゝろふかきにしくものあらじ」と序文で述べて『源氏物語類語』を著している。

このように田安宗武、松平定信父子による国学擁護の姿勢は、賀茂真淵や本居宣長らの国学者によって『源氏物語』に親しむ機会を与え、物語を和歌に詠みこんだり、あるいは自分なりの物語を書くことで、『源氏物語』は江戸の人々に浸透して行った。

3. 中国白話小説の流行

白話で書かれた、明代の長編小説や、明末清初の短編小説が日本にも輸入され、享保年間以降、いわゆる四大奇書と呼ばれる『水滸伝』『三国志演義』『西遊記』『金瓶梅』が日本人にも盛んに読まれるようになった。国学が江戸を中心に栄えたのに比して、白話小説は主に京都の古義堂出身の儒者や国学者を中心に流行の気運を見せた。

⁴ 松平定信「難波江」黒川真道編『日本教育文庫』女訓書篇、日本図書センター、1937

⁵ 盛田帝子「堀田正敦主催「詠源氏物語和歌」」『源氏物語の変奏曲』三弥井書店、2003

³ 中村幸彦「源氏物語の近世文学への影響」『中村幸彦著述集』第三巻、中央公論社、1983

その後、中国では白話小説に批評を加えたものも次々と書かれるようになり、日本でも金聖歎の評が施された『第五才子書施耐庵水滸伝』は儒者たちの間で評判となった。こうした経験を下地に日本では上田秋成らによって読本と言われる新しい小説ジャンルが生まれ、また小説読法の真髓を体得した清田澹叟や萩原広道らは『源氏物語』の評論を書くに至った。

3.1 「中国歴史小説通歴史愛好者」清田澹叟

清田澹叟についての詳述は、中村幸彦氏の論文⁶をもって周知のことと思われるので、ここではそれを参考にしながら清田澹叟の中国小説趣味を概観したいと思う。

清田澹叟（1719-1785）は京都儒学界の名家として知られた越前藩儒伊藤藤洲の三男で、すぐ上の兄に江村北海がいる。生来病弱であったため、読書に多くの時間を費やした人生を送った。それでも寛延元年、三十歳の時、五十首からなる漢詩集「千秋齋集」を福井藩主に献上したことから藩儒として出仕することとなった。

澹叟は始め古文辞派の服部南郭の詩に共感を持ったが、古文辞学に傾倒した形跡はなく、儒学者としては朱子学者であったという。詩人としては古文辞派の竜草蘆の詩社に参加し、芥川丹邱、武田梅竜らと出逢ったが、擬古主義の詩風に飽き足らず、中国で起こった反擬古主義派の人々、鍾惺・譚元春（竟陵派）や袁宏道（公安派）の主義・主張に同調するようになっていった。

澹叟は十九歳より明石藩儒であった梁田蛻巖に師事し影響を受けた。「竟陵派への親炙も蛻巖との交渉に於て進んだ。」と中村幸彦氏は言う。こうした古文辞派に対する批判的な態度は、山本北山が『作詩志穀』を発表する以前の事であった。

澹叟の兄江村北海は『日本詩史』を上梓し業績を残している。そのためもあってか、澹叟は次第に詩から遠ざかり後年は散文に興味を抱くようになった。澹叟は長兄の錦里の門人皆川淇園とその弟の富士谷成章との交遊を深めて行き、その結果彼の読書の幅

も広まっていった。淇園の文集には『水滸伝』を入手し、澹叟と会しては、その文の奇をあげて談資とした。」とあり、また「後には『西遊』『西洋』『金瓶』『封神』『女仙』『禪真』と、相競って、手にふれる小説にして読まざるはなかった」⁷と回顧している。この時期は「京都学会に中国小説の最流行期」と重なっていた事もあり、澹叟も早くから中国小説を好んで読んでいたようである。『水滸伝』は見ず知らずの下村と言う人から三年間借りて読破したという。こうした経験がもととなり、ついに宝暦十二年の秋に『照世盃』の訓訳を刊行することとなった。唐音(中国語)を理解した様子がなかったという澹叟が訓訳に挑戦した事はかなりの努力と苦勞を要したはずだと中村幸彦氏は指摘している。日本人が漢籍を読むのに四声は不必要であると考えていた澹叟は金聖嘆評の『水滸伝』等を研究し、独自に小説の読法を会得して行ったと思われる。その事を示す「読俗文三条」は『照世盃』の訓訳書に付されたもので、訓訳をする際の澹叟の考えを述べたものである。その一は、「俗文の訳読には字訓に拘わらずに行わねばならぬこと。」その二は、「一二の語義も必要ながら、作品の全旨をよく洞察して文面以外に作者の深意をつかまねばならないこと。」その三は、「俗文の書を読むにも歴史の知識が必要であること。」を掲げている。

3.2 澹叟の『源氏物語』への関心

「吾國モ唐土モ、上手ノ作りタル書ハ、何ヨリモマズ心匠スグレタリ。寓言ノ書ハ、一入心匠都合セザレバ、コトバ巧ナルトモ、見ルニタラズ。莊子ハイフマデモナシ。水滸傳ハ論ズルニタラザル書ナレドモ、心匠ハスグレタリ。吾國ノ寓言ノ書、予ガ見ル所ニテハ、源氏物語ヲ第一トスベシ。」

上記は明和五年（1768）に刊行された澹叟の随筆集『孔雀樓筆記』巻之三に見える文章である。数々の中国小説や金聖嘆評の作品を読んで、批評眼を身に付けた澹叟は吾国の小説にも目を向け、その価値を再認識することとなる。

「或時富士谷仲達ト夜談シ、言源氏ニ及ブ。仲達

⁶ 中村幸彦「隠れたる批評家—清田澹叟の批評的業績—」『中村幸彦著述集』第三巻、中央公論社、1983

⁷ 同上

イフ、「吏部⁸ヤドリシテ史記ヲ讀ム。タマサカノヤドリニ、無點の史記ヲ慰ニス。ソノオカヲソルベシ」ト。又イフ、「吏部史記ニ於テハ誰ヲ愛センヤ。戯ニ評シタマヘ」。予ガ曰、「吏部史記ニ於テハ、項王ヲ愛スベシ」。仲達掌ヲウツテ大ニ笑テ曰、「某モ左思ヘリ、某モ左思ヘリ」。(『孔雀楼筆記』卷之三)

この様な富士谷成章との文学談義は、山崎闇斎らのように道徳的な批判書として見るのではなく、純粹に文学書として『源氏物語』を論じ、また楽しんでいる様子がうかがえる。『孔雀楼筆記』卷之三には『源氏物語』の評論とも言うべき文章が5条に亘って書かれている。たとえば、次の如くである。

○「…夕顔ノ卷ニ源氏中将タリ。コノ中将意義甚深シ。モロモロノ官ノ中ニ、コノ時源氏中将ニテナケバナラズ。初メ中将ニ任ゼラル、時、スデニ河原ノ院妖怪ノ一段ヲ伏ス。」

○「源内侍ノ一段、イフダチ過ル頃ト云ヲ以テコレヲカク。コノユフダチ心ヲ付テ見ベシ、タバニ云タルモノニアラズ。」

○「薫中将ハ源氏ノ骨ヲ得、匂宮ハ源氏ノ肉ヲ得。コノ二人ヲ以テ、二人ニテ、一源氏ヲ云テ未ダ足ズ。」そしてその総論ともいうべきは、

○「スベテ源氏ノ一書、ソノ妙處ハ人情ヲ曲盡スル所ニアリ。タマサカ風景ヲ装點スルノ語アルモ、妙ナラザルナシ。畢竟ヲホカラザルト、ナガメラザルトニアリ。吾國唐土ノ文トモニ、作者ノ才不才、コレニテモ見ベシ。篇々章々装點ヲ重疊スルノ書ハ、厭ベキモノゾ。」と。

『源氏物語』を中国の小説批評にならって、筋書きや人物に対する細かい分析を試みている。

平生、澹叟が門人に戒めた三條がある。「官事ヲ言フコト勿レ」、「彼ヲ華ニシ我ヲ夷ニスルコト勿レ」、「詩文ヲ以テ人事ニ充ツルコト勿レ」。(『孔雀楼筆記』跋)

中国の正当な古典にのみ傾倒する古文辞学に反省を促し、日本の俗文学の魅力を中国白話小説と対等に評価した澹叟の姿勢が窺われる。内外の俗文学を読み漁り、評論活動に多くの時間を費やしていた澹叟であったが、福井藩儒としての自覚は常に失わな

かった。上記の一條と三條にその心構えが表れている。漢詩人としての業績は兄の江村北海に譲ったが、評論家として

『芸苑談』、『欧陽文忠公文集』、『孔雀楼筆記』などの業績を残している。

3.3 国学者萩原広道の『源氏物語評釈』と白話小説の受容

萩原広道(1815-1863)は岡山藩士の子に生まれたが事情により家を継がず、大阪に出て国学者として活躍した。弘道の代表作は『源氏物語』の注釈書である『源氏物語評釈』がある。これについては得丸智子氏の論文に詳しい分析がある⁹。

『源氏物語評釈』は、「花宴」の巻までで終わっていて完成をみる事がなかった書であるにも関わらず、その評価は高いと言われる¹⁰。目録を見る限り注釈書というより評論集とも言えるもので、本居宣長の『玉の小櫛』などを参考にしつつ『源氏物語』を客観的にとらえた批評の書となっている。広道は本居宣長に弟子入りは叶わなかったが、終生尊敬の念を持っていたという¹¹。注釈書としては異色のこの書を書き上げた広道の視点はどこで養われたのか。実は広道は中国の白話小説『好逑伝』の翻訳を手掛けている¹²。清田澹叟のような儒者が白話小説の翻訳に挑戦した事実は上記にも述べたが、国学者であっても当時出版されていた『唐話纂要』、『俗語解』、『忠義水滸伝解』等の唐話辞書を駆使して翻訳を試みていたようである¹³。「広道は国学を講ずる余暇常に稗史を好んでいた」¹⁴ ことが白話小説の翻訳に結びついていたと考えられる。しかし広道が稗史を読み、白話小説の翻訳を手掛けたとしても、滝沢馬琴の影響無しには二十一項目の文章の法則を独自に考え出すのは難しいと得丸氏は指摘している。馬琴の死後『開

⁹ 得丸智子「萩原広道の源氏物語論—宣長と馬琴の接点として—」『国語国文』第五十六卷第十一号、1987

¹⁰ 同上

¹¹ 中村幸彦「近世における小説としての源氏物語評」『中村幸彦著述集』第七卷、中央公論社、1984

¹² 得丸智子「萩原広道の『通俗好逑伝』」『江戸小説と漢文学』汲古書院、1993

¹³ 同上

¹⁴ 注9に同じ

⁸ 紫式部のこと。

巻驚奇侠客伝』の続編を書いている¹⁵ほどの広道は馬琴をも尊敬していたようである。広道は宣長の「物のあはれ」と馬琴の「稗史七法則」に共感し、それらをうまく取り入れて『源氏物語評釈』に生かしたのである。

4. 原古処『讀源語 五十四首』について

和文で書かれた平安王朝文学を江戸時代に起こった復古主義に同調して再び光をあてたのは国学者たちであったが、漢学者たちも中国白話小説の魅力を通して小説としての『源氏物語』の面白さに引き込まれていったようである。

和歌文化の伝統である「詠源氏物語和歌」を漢詩の分野で試みたのが原古処の『讀源語 五十四首』である。これは『源氏物語』の各巻を五言絶句で詠んだもので、特筆すべき点は、和歌の場合は各人一首ずつの詠み合わせであるが、『讀源語 五十四首』は五十四首を原古処一人で詠んだものである。同様の例では、作者が未詳であるが正応四年（1291）八月に成立した「賦光源氏物語詩」がある¹⁶。

これらは頼山陽も指摘するように、『源氏物語』の内容を熟読していなければ出来ないことである。国学者が『源氏物語』の注釈書あるいは評釈書を書くのと同じような理解を持たなければならない。

秋月藩の藩儒であった原古処は国学にも深い造詣を示した人である。古処の国学思想への傾倒は、師である亀井南冥の影響が強いと言われる¹⁷。古処の遺作の中に漢詩文に交じって「叔明」と署名のある自筆の和歌が秋月郷土館にいくつか残っている。かつては三、四百首の和歌があったと言うが、現在では所在が分からない。「叔明」は古処が雅号として用いたもののようである。古処の和歌には朱点が施され、訂正された箇所が見られることから、和歌を指導した人があったと山田新一郎氏は指摘する¹⁸。そ

の人物は秋月藩家老であった宮崎安弼であろうとの推測である。漢詩人として名声を馳せた古処が、和歌にも変わらぬ思いを抱いていたことを示す漢詩がある。

清音堂靜舊山河 潭影巒光退食多 三十一言新著述
泣人眞在大倭歌

こうした事情を踏まえ、原古処が讀源語詩を作った動機は何であったのかを考えて見たい。

4.1 『讀源語 五十四首』制作の時期と動機について

原古処が最初に『源氏物語』を漢詩に詠んだのは文化九年（1812）、四十六歳の時である。古処は文化七～八年と九～十年の二回、藩主に随行して江戸勤務を果たしている。一回目の東上は無足四人扶持十四石から百石馬廻組へと昇進したばかりの晴れやかな時期の江戸勤務であったが、二回目の東上は事情が違っていた。文化八年五月秋月に帰った後、十一月に藩士七名による福岡藩への出訴に端を発した、所謂「織部崩れ」といわれる政変が起こり、古処と親しかった渡邊、宮崎の両家老は処分を受けた。政変が落ち着いた十二月、古処は退役を願い出たが聞き入れられず、藩からの要請に従って文化九年三月三日、二度目の藩主随行を果たす。しかし、文化十年六月二十六日「江戸詰中思召不叶候儀有之退役」を言い渡され、納戸頭を退役。八月二十一日には「御詮議ヲ以家業御免、平士被仰付」られた。さらに九月二十四日には「願通隠居、家督被仰付」となり、長男瑛太郎が百石の馬廻組を相続した。この後、古処は私塾で子弟を教えながら、詩人として各地を遊歴する人生を選択した。

上記の事から見て、文化七年から十年は原家にとって家運が目まぐるしく変化した数年間であった。古処の公務に対する心構えも一回目の江戸随行と二回目の時では大きな開きがあった。既に致仕を願い出た後の江戸勤務は、致仕後の自らの身の処し方を念頭に置いてのものであったと思われる。

一回目の江戸滞在中、即ち文化八年閏二月、古処は増山雪斎、頼杏坪、渡邊玄対、宿谷喜太郎（田安

¹⁵ 注6に同じ

¹⁶ 伊井春樹編『源氏物語注釈書・享受史事典』東京堂、2001

¹⁷ 井上蘭崖「原古処先生の源語詩巻に就いて」『筑紫史談』第62号、筑紫史談会、1977

¹⁸ 山田新一郎『原古処・白圭・采蘋小伝及詩鈔』秋月公民館、1951

文学)等の一流の雅人との交際を経験している。詩書画楽、それぞれに秀でた文人を集めた雅会に出席し、その能力の高さに驚きを以て秋月の藩士に手紙を書いている。その中に「奥ニたそと申御側居申候。才女ニ御座候。歌を讀書も達者ニ仕候。詩を遣申候処返歌仕候。」とあり、側女のたそという才女に巡り合った驚きを付け加えている。たそに贈った古処の詩は「赤紫清泉才足誇 千秋翰苑闢芬葩 紅桃緑柳今猶古 春満風流女史家」、それに対してたそは「汲れすよ花も柳もそれなから赤紫泉の水清くして」と返し、さらに古処は重ねて「赤羽橋辺花鳥春 西冥弧客意難親 真成莫是遺彤管 争識東方有美人」と贈っている¹⁹。

この後、文化九年に到って古処は、『源氏物語』に親しみ詩作を試みるわけであるが、「あるいはこの側女あたりからの影響も考えられなくはない」²⁰と宮崎氏は指摘する。亀井南冥の影響で国学にはもとより関心が深かった古処が、和歌や『源氏物語』の魅力に引き付けられたのは自然の成り行きであったと思われる。儒者としての立場を気にすることが必要でなくなった彼は、本来の、自由人に憧れた自分を取り戻す道を模索していたのである。

側女たちとの接触は「源氏物語」を読み始めた一つのきっかけとなったと思われるが、もう一つの要因が古処に「讀源語詩」を詠ませるのに影響したとも考えられる。それは上記でも述べたように松平定信の文人サロンの存在である。文化九年～十年の間江戸勤務であった古処はこの文人サロンについて聞き及んでいたと思われる。それというのも文化八年二月の雅会に出席したメンバーの中には、田安文学の宿谷喜太郎もいたことなどを考え合わせると容易に推測できる。さらに文化十一年十一月の「詠源氏物語和歌」が直接の引き金になっていたのではなかろうか。古処がいつ頃から和歌を習い始めたのかは定かではないが、このころ源氏物語五十四帖を和歌で詠むには無理があったであろう。

4.2「讀源語雜詠十首」と『讀源語 五十四首』について

江戸在住の文化九年、源氏物語を読んだ古処は「讀源語雜詠十首」と題して五言絶句十首を詠んでいる。

海東姫氏国	花鳥故嬋娟	偉多文章美	都須彤管傳
上東門院女	藤紫上頭居	一笑春風面	嫩辭花不如
国風三十一	句々泣人神	宜我櫻花賞	獨占天下春
駘蕩花朝讌	佳人獨目成	鳥鳴春又莫	無地遡愁情
金屋巖金鎖	夢魂不可追	獨有御溝水	花柳報新詞
歌詩互唱和	情緒結纏綿	俱摘鸞鳳藻	何得不相燐
緑縷同心結	銀環繫瑤撥	鏤以藤兼茆	花々情所寓
朝儀儼且肅	上壽立良辰	偷眼金門裡	熙々如有春
衆妬言如簀	天譴削仙籍	弱水從他廣	幡紫或可劈
避世桃源洞	花明酒亦馨	回頭思往事	大夢幾時醒

そして遂に文化十二年に、五十四帖のそれぞれの内容を五言絶句にしたためて「讀源語 五十四首」を書き上げた。まさしく「詠源氏物語和歌」に対応する漢詩版である。しかしこれは古処一人の作品であり、多くの人の詠み合わせとは異なる。漢詩の場合そのような習慣はあったのだろうか。

古処は文化十一年ごろから家族を従えて友人、知人を訪ねて遊歴の旅に出かけている。文化十三年(1816)、筑前黒崎の釣鼈亭に宿泊していた時に風邪に罹りしばらく滞在した。その時にこの五十四首の漢詩をちらし書きにして巻物に仕立て、お世話になった宿の主人に贈ったことが跋に書かれている²¹。それには次のようにある。

獲寒疾不可風留滯数日主人情意甚至矣。時向小満
暑長如年臥蓐無聊病間作。此書以為消間之具魚供主
人之一粲云。
古處山樵震

後の文政元年にこの釣鼈亭を訪れた頼山陽がこの巻を目にして驚嘆し、古処の跋の後に跋を書き残したことは有名である²²。それに曰く、

¹⁹ 宮崎修太「古処山樵東行譜」(『江戸時代文学誌 第七号』) 柳門舎、1990

²⁰ 同上

²¹ 注 11 に同じ

²² 注 4 に同じ

非盡讀五十四帖深領其意者不可作此詩。盡讀五十四帖深領其意而腸無錦繡不可作此詩。藤芝山宮詞後僅觀此什矣。

賴襄走筆題、時五月既望歲戊寅也。

(尽く五十四帖を読み深く其の意を領むる者に非ざれば、此の詩を作るべからず。尽く五十四帖を読み深く其の意を領めて、腸に錦繡無ければ、此の詩を作るべからず。藤芝山の宮詞²³の後、僅かに此の什を觀るのみと云ふ。)(壬生里已訳)

この後、釣鼈亭を訪れた古賀穀堂も山陽の跋に続いて以下の詩を書き残している。

麗藻艷情知両全 紫媛源語古今傳 五十四帖新題句
絶勝宮詞一百篇

題古處翁讀源語詩卷
穀堂

このほかにも古処の『讀源語詩卷』は島根県石見国安濃郡宅野村の泉全斎宅に所蔵されていたものを古処の門人長澤処山が泉家の一族の家に滞在した時、それを所望したため、全斎は処山にそれを与えたことが全斎の『涵虚樓遺稿』の詩序に書かれており、それに長三洲、菊池三溪、大沼枕山の評が併載されているという²⁴。この詩卷は明らかに釣鼈亭のものとは別卷であろうと井上氏は稿中で述べておられる。泉全斎は富豪藤間家の出身で同じく富豪であった泉家の養子となり、始め頼事庵に学び、後に頼山陽に師事した。その後全国を回って見聞を広め、帰郷後は「為山塾」を開いて子弟を教授した。

『涵虚樓遺稿』にある詩序を以下に掲げる。

中秋雨長澤處山、携其室而至、分韵是夜始雨後晴、處山筑前秋月人善書近寓泉春斎氏、

余蔵原古処先生詩卷也久矣。長澤生觀而有欲得之色。乃舉以贈係以詩。

源語五十帖。原翁收入詩。不踵前人武。首首吐新奇。

一卷忽落手。珍重不停披。錦幅珠為軸。眞贗復何疑。中行雜小草。位置自參差。神采溢紙上。其人可追思。友人處山生。机上適閱之。正襟先頓首。翁是吾先師。泰梁一壞後。霜星幾度移。師生舊縁在。遺墨見天涯。我竊察其意。割愛乃相遺。此卷得其主。一生好護持。阿筆紀本末。堅氷結硯池。他年君須記。風雪夜深時。

三洲曰、韓公解書卷、貽中叔、古人稱之泉君之胸次、眞與韓公争高詩亦悽婉眞摯、可與書記並傳、

三溪曰、名儒詩卷長澤生一睹食為之動、此公曠懷輟而贈之、可謂千古佳話矣、○又曰、泰梁一句無限筆力、

泉全斎がなぜ古処の『讀源語詩卷』を有していたのかは不明であるが、あるいは師の頼山陽から『讀源語詩卷』について聞かされていたのであろうか。上記の文章からは、全斎が古処の詩の素晴らしさを十分認めて、それを愛唱していたことが分かる。この『讀源語詩卷』は長澤処山によって秋月に持ち帰られたと思われる。宮崎修多氏の調査によれば、秋月郷土館の美術館の倉庫に『讀源語五十四首』の卷子に仕立てたものが保存されている²⁵ということであるが、これが長澤処山により秋月に持ち帰えられたものかどうかは不明である。

以上の二つの詩卷とは別に古処は、文化十三年正月七日の日付のある『讀源語五十四首』一卷を娘采蘋に与えている²⁶。これはところどころに絵が挿入された、娘に与えるのにふさわしく愛らしい一幅である。采蘋はこの一卷を写して、遊歴の際自ら携えて、各地で出会った詩人や学者に自慢して見せたということである²⁷。采蘋が書き写した『讀源語五十四首』の所在は不明であるが、現在国立国会図書館の鶚軒文庫にある『采蘋詩附読源語詩』は采蘋の自筆の詩と古処の『讀源語五十四首』の写本が一緒に綴じたものである。采蘋が写して持ち歩いたものとも考えられるが、さらなる調査が必要である。父の偉業は娘によっても全国に披露されていたことが知

²³ 後藤芝山『宮詞百首』、1776刊。宮詞とは宮廷の出来事を詩に詠じたもの。

²⁴ 注4に同じ

²⁵ 宮崎修太「古処山樵東行譜」(『江戸時代文學誌 第七号』) 柳門舎、1990

²⁶ 緒方無元編『郷土先賢詩書画集』郷土先賢顕彰会、1975、P55,56

²⁷ 同上

れるのである。古処は采蘋の将来に多大の期待を寄せていた。江戸で知り合った奥向きの側女たちの教養の高さに刺激されて読み始めたであろう『源氏物語』を娘にも読んでほしいと願ったのかもしれない。しかし采蘋が和歌や和文に親しんだ形跡はない。

図1 古処が采蘋に書き与えた詩巻



出典：緒方無元編『郷土先賢詩書画集』
郷土先賢顕彰会発行、1975

4.3 江馬細香の「讀源語」詩について

江馬細香の詩稿の中に文政十二年から天保二年にかけて作られた「讀源語 節五」と題する七言絶句五首がある。『源氏物語』を題材に漢詩を詠んだ人は古処の他にも菅茶山や古賀精里等が挙げられるが、細香が讀源語詩に取り組んだのはおそらく師である頼山陽の勧めによるものと考えられる。その理由としては、文政元年の釣鼈亭での山陽の経験がある。この巻物を目にして驚嘆した山陽は、細香にとってうってつけの教材であると考えたのだろう。細香の文政十二年春の詩「読源氏物語」に付された山陽の

評がそれを裏付けている。細香没後十年目に出版された詩集『湘夢遺稿』下巻に収録されたこの五首は、門玲子氏によれば制作時期がそれぞれ違い、「夕顔」「空蟬」は文政十二年春の作、「若菜上下」は文政十二年夏ごろの作、最後の「幻」は天保期に入ってからのものである²⁸。原題はそれぞれ「讀源氏物語」「紫史若菜篇上・下」「源語詩」であったという。「讀源語 節五」を以下に示す。

夕顔

瓠花深巷見嬋娟 一扇相思兩世縁 香燼芳空根不断
又抽柔蔓故纏綿

空蟬

衆艷一時難併開 葵花忽被妒風摧 紅閨多少春宵夢
我愛空蟬蛻來

若菜上

自惜娉婷宜遠嫌 輕心何事露眉尖 一重花影毬場近
無頼狸奴揚繡簾

若菜下

春意如泉湧不留 擬攬青帝領溫柔 一連枝上寒暄異
落葉蕭蕭獨占秋

幻

入春無復愛春人 落花落開感此身 即色是空空即色
此中幻影認難真

頼山陽は文政十二年春の作に対して以下のような評を下している。

瞥見讀源氏物語、題意必有正論卓異者、及讀之、唯是如此、然亦好題目、苟作則每篇一詩、成五十四絶句亦可耳、然後以五古一首為跋、用莊語終之尽善矣。

（読源氏物語を瞥見するに、題意必ずや正論卓異なる者あらんと、之を読むに及んで、唯是此の如し、然れども亦好題目なり、苟も作らば則ち每篇一詩に

²⁸ 入谷仙介監修・門玲子訳注『江馬細香詩集『湘夢遺稿』下』汲古選書、1992

して、五十四絶句を成すも亦可ならんのみ、然る後五古一首を以て跋と為し、莊語を用いて之を終うれば善を尽せり）（門玲子氏訳）

この助言に従って細香は讀源語詩を作り続けたという²⁹。残念ながら『湘夢遺稿』には上掲の五首が収録されているのみで、その他に、山陽の助言にある「五古一首為跋」に相当する天保五年の作とされる「讀紫史」七言古詩一首が収録されている。細香は師の助言に沿うように努力をしたが、ついに古処のように五十四首を満足のいく形で作り上げる事はできなかったようだ。しかし、跋となる古詩は山陽の死後に完成させている。山陽の評はもらえなかったが、後藤松陰や神田柳溪らの評が付されている。

以下にその古詩を示す。

誰執彤管写情事	千載読者心如醉	分析妙処果女兒
自与丈夫風懷異	春雨剪灯品百花	
惜香憐玉自此始	銀漢暮渡烏鵲橋	仙信曉通青鳥使
瓠花門巷月一痕	蟬蛻衣裳灯半穗	
夏虫自焚投焰身	春蝶狂舞恋花翅	狸奴無頼細簾揚
嫦娥依稀月殿遙	尤雲殢雨寸断腸	
冷灰殘燭偷垂淚	五十四篇千万言	畢竟不出情一字
情有歡樂有悲傷	就中鍾情是相思	
勿罪通篇事涉淫	極欲說出尽情地	小窓挑灯夜寂寥
吾儂亦擬解深意		

『源氏物語』読後感と言えるこの古詩を作ることによって山陽の助言にある「用莊語終之尽善矣」を果たしたことになる。師の教えを忠実に守り、一生懸命努力し続けた細香の姿が窺える。

5. 讀源語 五十四首（古処山堂詩鈔）

「讀源語 五十四首」は古処の詩集『古処山堂詩鈔』に収録されているが、采蘋の詩集同様、古処の詩集も未だ出版の機会に恵まれていない。そのため敢て五十四首すべてを下記に掲げることとした。紙面の関係上、説明を加える余地はないが、古処が『源

氏物語』の各巻をどのように理解し漢詩で表現したかを知る資料として有益だと思われる。なお、詩のタイトルは『古処山堂詩鈔』からのもので、括弧内の題は『源氏物語』の巻名である。『古処山堂詩鈔』中の詩の順番は『源氏物語』の五十四帖の順序とは入れ替わっている箇所があるが、『源氏物語』の順序にならって並び換えた。

1、桐壺

淑景梧桐舎 春風新弄璋 湛恩錫源姓 鳴鳳下朝陽

2、帚木

夜雨清齋靜 挑燈品麗人 蕙蘭各區別 色々自成春

3、空蟬

豈無行路露 延濕洞房帷 寢衣蟬脫去 不使汚蘭姿

4、夕兒

瀟灑五條坊 白花蔓短牆 為歡知幾々 腸断九原霜

5、若紫

移植青郊紫 階庭如有春 艷姿將綽態 髣髴意中人

6、末摘花

玉孫仁且慧 獨問放宮寒 雖有絲麻美 不捐蒯與菅

7、紅葉賀

開筵紅葉下 繡幕夕陽多 中將稱連壁 讓他青海波

8、花宴

獻題南内讌 花撲舞衣香 醉過弘徽殿 朦朧月轉廊

9、葵

綠鴨齋宮禊 簪花桂與葵 欲觀源大將 爭路進雲輜

10、柿

齋宮何處尋 華表在豐草 秋暮人將行 落月還懊惱

11、花叢里

幽居問麗景 紫橘花零秋 杜鵑聲若怨 語盡舊宮愁

12、須麻

關路風霜苦 沙汀鷗鷺愁 怪來明月色 不似九重秋

13、明石

帝子黃金勒 夜登赤石臺 繡扉未全鎖 似待月明來

14、漂漚

繫纜澄江岸 松汀儀衛新 不圖梁棟質 却托女蘿親

15、關屋

逢関名不稱 妾入君將出 濁水與清塵 相看輒相失

16、蓬生

藤蔓松愈老 廢垣明月中 蓬蒿繁白露 無路問常宮

17、繪合

²⁹ 入谷仙介監修・門玲子訳注『江馬細香詩集『湘夢遺稿』下』汲古選書、1992

閨畫清凉殿 宮娥競綺羅 争如遷客淚 如墨寫須摩
18、松風
 誰邊應稅駕 大堰舊山莊 氷軫寫心曲 松風助響長
19、薄雲
 藤宮絶世媛 寶靨花相似 黃梧雲不歸 落日暮山紫
20、槿（朝顔）
 夢断驚秋盡 愁深如夜長 薜花霜後色 猶有舊時香
21、乙女
 五節新歌舞 姍々翻羽衣 因思當昔伴 鬢髮作雲飛
22、玉鬢
 流離筑紫船 禮拜長谷寺 一入相公門 瓊姿乍嫵媚
23、初音
 澹蕩王正月 黃鸝先報春 梅花香滿院 中有断腸人
24、蝴蝶
 蘭橈何處至 供佛滿船花 蝴蝶黄金隊 承風舞袖斜
25、螢
 香風傳笑語 螢火照簾鈞 帝子腸將断 玉階夜雨愁
26、常夏
 水殿凉生早 西臺秉燭遊 王孫歸不得 瞿麦滿籬秋
27、篝火
 初月秋來夜 新凉生玉階 瑤琴聲断續 莫是鳳皇諧
28、野分
 花草豐宮錦 露華綴玉旒 終風吹且暴 使我獨無秋
29、行幸
 金鞍紫綺袴 臂得海東青 欲遂前蹤去 大原白雲馨
30、蘭（藤袴）
 隔簾遺紫蘭 心曲欲陳難 芳質元同臭 非關燕姑看
31、真木柱
 新人從門來 故人從閨去 繡柱兒所馴 莫教燕々汚
32、梅枝
 煙淡長廊月 風香滿院花 無端絲管起 春色在天家
33、藤裏葉
 裊々藤花紫 纖々月影新 付君園裡色 似有可憐春
34、若菜上
 帝重親々典 羽儀擬上皇 離々八佾舞 厭彼萬年觴
35、若菜下
 第三貴公主 婉孌愛貓兒 彩繩披繡幕 禁嚮被他窺
36、柏木
 嗟哉藤右軍 山阿已埋玉 故宮南風薰 楓栢交新綠
37、横笛
 誰將遺愛笛 拭涕贈王孫 剝石聲瀏亮 歸來月夜魂

38、鈴虫
 粧棲拋寶鏡 浄土若欣求 火宅凉風起 虫聲乍報秋
39、夕霧
 山秋霧忽起 天暝没幽蹊 不假西廂宿 歸鞍咫尺迷
40、御法
 移佛陳香燭 請僧轉法華 紫雲飛不盡 春殿雨天花
41、幻
 香魂招不返 兀々又逢秋 雁影冥々去 佳人可迹不
42、雲隱
 無詞
43、勾宮
 容姿春月柳 濯々有輝光 右衛源中将 坐留三日香
44、紅梅
 紅梅可憐樹 送色映東廂 出入君壞袖 何花不放香
45、竹河
 繡戸含情關 彈琴且倚歌 容向花園去 聽吾唱竹河
46、橘姫
 八條尋帝子 埋跡白雲山 梨曲松添韻 禅心石共頑
47、推本
 白馬衝煙雪 故宮問繡幃 石牀堆墜葉 彷徨將安依
48、角総（総角）
 秋風帝鄉至 浙瀝落愁邊 誓此同心結 了他未了縁
49、早蕨
 春山雪徐盡 紫蕨挺拳香 適逢禅客贈 紅淚滿頃筐
50、宿木
 碎錦霜餘薦 寄生怪樹幽 携歸誰向贈 感到故山秋
51、東屋
 風雨夜如晦 四阿涓滴鳴 佳人實難得 彼美亦傾城
52、浮舟
 移花山閣下 妖艷奈春何 狂蝶真無頼 趁香付逝波
53、蜻蛉
 妹如風外花 姊如雪中月 薄命共蜉蝣 各自抱愁没
54、手習
 叡麓女僧扉 招魂魄乃歸 學書消世慮 投鏡脱塵機
55、夢浮橋
 多情源大将 欲了再生縁 請見空中色 結来作大年

6.おわりに

以上、江戸時代における儒者及び国学者に『源氏物語』が様々な形で受容されてきた経緯を見て来た。

江戸時代の儒者が詩文だけでは飽き足らず、物語の面白さに引き込まれて行った様子は清田澹叟の例

からも窺われる。享保以来、日本の知識階級を風靡した中国小説熱はやがて清田澹叟や上田秋成によって、馮夢龍の「三言」や長篇の『水滸伝』『女仙外史』『金瓶梅』等の中国白話小説と並んで、小説としての『源氏物語』の価値を再認識させることとなった。こうした背景には「近世人には、和歌のみを対象としては、何かあきたらぬものが感じられた…近世人の文学観の中に、漸く「小説」が大きく根をはり初め」³⁰た状況があった。

上記の状況から原古処も源氏物語を愛読する機会を得たと考えられる。古処が交流した儒者たち、たとえば頼山陽には『源氏』の「若菜上」を題材にした「猫」という詩があり、それを読んだ菅茶山が「恐らくは是れ柏木右衛門」と評した³¹ことなどから両者の『源氏』の理解度が分かる。さらに頼山陽と古賀穀堂が古処の詩巻に残した跋からも同じことが言えるのではないかと思う。幕末に到って、頼山陽の弟子泉全斎の例に示したように古処の五十四首を愛唱する者、そこに跋を書き残した長三洲、菊池三溪、大沼枕山らの儒者も『源氏物語』の内容を理解して、その魅力をも十分知っていたものとする。

江戸時代の儒者たちにとっての『源氏物語』の受容の仕方は、女子の教養書としての面から淫書と烙印を押された時期もあったが、中国小説の愛読者が増えるに従って、小説としての評価が高まり、儒者の間でも愛読する人たちが増えて行ったのではないだろうか。

澹叟の場合、職務の合間を縫って、東海道を下る駕籠の中で『水滸伝』を読みふけた³²と言うが、原古処もおそらく江戸勤務の合間や、上り下りの道中で『源氏物語』を読んでいたのではないだろうか。儒教の規律に縛られた儒者という職業から、せめて精神だけは解放し、心を遊ばせたのが『源氏物語』であったり、白話小説であったのかも知れない。

(Received: September 30, 2012)

(Issued in internet Edition: November 1, 2012)

³⁰ 「源氏物語の近世文学への影響」『中村幸彦著述集』第三卷、中央公論社、1983

³¹ 杉下元明『江戸漢詩』ペリカン社、2004

³² 中村幸彦「近世における小説としての源氏物語評」『中村幸彦著述集』第七卷、中央公論社、1984